

令和3年1月27日

# 南の風 384

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

先日、中学校の指導者の方からメールが来ました。内容は次のようなものでした。

「ウインターカップの男子決勝のゲームは凄いゲームでした。テレビで観戦されたでしょうか。東山が大量リードしていたのを、仙台大学附属明成が4Qで逆転して勝ったゲームでした。観ていらっしやればどんな感想をお持ちですか。」というお尋ねでした。

男子の決勝はライブで観ることはできなかったのですが、見逃し動画で観ました。前半東山が有利な展開でした。後半、明成が追い上げ逆転し、そこから接戦となり勝敗の行方は混沌となりました。少し時間は経ってしまいましたが、折角のお尋ねなので南の風で取り上げます。

両チームの『ベンチワーク』も含めて、ゲームの流れを追いながら感想を書きます。

読者の皆様はぜひ見逃し動画を観ていただき、本号を読んでいただくと臨場感が増しますのでお奨めします。2020ウインターカップバスケ男子日程・結果で検索してください。12月29日をクリックして見逃し動画で観られます。

結果です。

	1 Q	2 Q	3 Q	4 Q	計
仙台大学附属明成	20	6	16	30	72
東 山	20	20	15	15	70

立ち上がり東山はハーフのマンツーマンです。明成は準決勝までの2-3のゾーンから3-2のゾーン変えたように見えますが、これは8番の山崎一渉（通常は3-2の前に配置）選手を、状況に応じて動かす戦術です。東山の9番ジャンピエール選手《206cm》の動きに対応するため、ドロップして下を固めるチェンジングゾーン（1-1-3にしたり、2-3にしたりする）のように見えます。

先手を取ったのは明成で、ゴール下、ジャンプショット、3P、ドライブで得点する。東山は、明成のゾーンをジャンピエール選手の中に合わせ、外にパスバックして攻めようとするがうまく行かず、9対2になったところでタイムアウトを取る。タイムアウト明け、東山はベンチの指示である、ドライブで中を突く、あるいはジャンピエール選手へのゴール下へのパスが通りゾーンに対応できるようになる。

その後明成はドライブからのショットやミドルショットから加点する。東山はゾーンの動きを読み、空いた選手のミドルショットやジャンピエール選手のゴール下、トランジションの速攻で得点する。1Qを終わった時点で、20対20となる。

1Qを振り返ってみると、東山はゲームの入りでは相手のゾーンにやや戸惑ったものの、徐々にアジャストができ、中を突くプレー（ポストのジャンピエール選手への合わせやペイントへのドライブからのショット）を中心にオフェンスが機能していた。

明成はどちらかというと、立ち上がりからミドルや3Pシュートが中心であった。だれに頼るということではなく、ボール回しとカットから空いたら自分が打つという流れが徹底されていたようだ。どちらも譲らず、2Qへと向かう。